



地域の「しあわせ」を考え・行動する



NPO法人 よこはま地域福祉研究センター

Annual Report

2017-2018 (2017.4.1 ~ 2018.3.31)

Vision

しあわせ（福祉）の実現のために、
誰もが可能性を追求してやまない
柔らかな心と勇気に溢れる社会

私達の5つの行動指針

NPO法人よこはま地域福祉研究センターは、設立5年目を迎えることができました。私たちの取り組みは、すべて「人々の幸せの実現」を共通の目的として行っています。また、そのプロセスでは、既存のあり方に捉われない柔軟な発想とイノベーターであろうとする勇気を大切にしています。私たちの行動指針は、今年も変わりません。

- 1 共通の目的・意欲・支え合いをモットーに**
研究センターが一丸となって、事業を行うために、日々、確認実行します。
- 2 顔の見える関係づくりから はじまる はじめる**
設立時の私たちの理念です。いつも、顔の見える関係が、取り組みの始まりです。
- 3 対話・対話・対話**
話す×聴く。内部でも外部でも広がります。
- 4 人・もの・場 すべてエンパワー**
新しいものを生み出すことにもこだわります。今ある存在価値を高めることも大切にします。
- 5 インクルーシブ（共生）へのこだわり**
特定の人だけの社会ではありません。だれもの「しあわせ」にこだわります。

早いもので本研究センターも設立から5年が経過し、事業の幅もまた内容も広がりを持てているように思います。様々な所からお仕事をご紹介頂きながら、そうした組織や機関との連携や協働も、やはり少しずつではありますが、確実に広がってきていることを実感しています。

一方で近年の社会福祉を取り巻く課題は非常に幅広く、また複雑化の様相を呈しており、広範な分野の知見を持ち、その分野との連携なしには効果的な問題解決には至らない、あるいは、そもそも解決にはほど遠いのではないかということを日々感じています。それは必然的に、私たちの研究・研修の対象となる領域の拡大、それに伴っての広い領域の機関や団体との連携なしには、私たちの実践・実績は広がっていかないと改めて気づかされることになっています。

本センターの実践を進めていく中で、多領域・多分野（他分野）との連携や協働は欠かすことができないものですが、ここで再度、私たちの組織が大切にしてきたもの・抛り所としてきた考え方や知見について確認をしながら、今後に向けての「センターとしての」方向性をきちんと示していくことの重要性を改めて感じています。そうした方向性が出せるかどうかは、今後10年、20年と継続していける組織を作れるかどうか、そうしたことに繋がっているのではないのでしょうか。

本センターのミッションは「人々のしあわせ（福祉）の実現」ということですが、人々のしあわせを考えていくためにも、私たちがこれまで何を大切にしてきたのかを今ここで確認をし、次へのステップにつなげて参りたいと思います。

5年という節目を終え、これからの「よこはま地域福祉研究センター」を考える上で今一度、自分たちの組織を振り返りながら、新たな連携や協働を作り上げていきたいと考えています。どうかご指導のほど、よろしくお願い致します。



理事長
豊田 宗裕

Munehiro Toyoda

PROFILE

聖徳大学・聖徳大学短期大学部心理・福祉学部 社会福祉学科 教授
＜主な著書＞
「少子化と社会法の課題（共著）」法政大学出版会、「社会福祉の新潮流⑤地域福祉論（共著）」学文社／「地域福祉とソーシャルワーク実践／実践編（共編著）」樹村房ほか多数

よこはま地域福祉研究センターのミッションは、「しあわせ（福祉）の実現のために、誰もが可能性を追求してやまない柔らかな心と勇気に溢れる社会」を創ること。「しあわせ（福祉）」とは？と問われたならば、「共に生き、共に支えあって生きる」ことと考えています。

発足から5年。地域社会と向き合い、課題発見から解決まで、プロセスを大切に考え行動しました。注力したことは、分野・領域、立場を超えた人や組織と連携・協働により社会の課題に気づき、解決策を探ること。「対話」を重ね、調和的な協働が広がる、強く、しなやかなマネジメントも目指しました。

しかし、容易な仕事は一つもありませんでした。福祉の実現のために市民の主体性が求められています。しかしながら今、市民生活には、様々な困難が生じており、多様なリスクを想定した育成の仕組みなしには、主体性育むことはもちろん、主体性の必要性さえ伝えることはできません。私たちは、研修事業に限らず、すべての事業で、人や組織をエンパワする仕組みや方法を考えることに多くの時間を費やしプログラムの開発に努めました。

また、組織間連携の難しさも課題でした。効果的な連携・協働は、前提として、自律した個人の力の集合体である組織が求められます。しかしながら、組織が抱える多様な課題は、連携協働のきっかけを失い、継続を困難にし、組織・社会の成長や発展を阻みます。

私たちは、自身の組織を省み、設立当初から目指した「学習する組織」であるために、4つのプロジェクトを柱に社会の今を捉え議論を重ねました。こうした日常が、いつ何時、外部組織との連携・協働のチャンスを迎えても、対話し、共に切磋琢磨することができる組織になれると信じていると思っています。「自分たちが何をしたいか」ではなく、「自分たちが今、向かうべきテーマは何か」という問いを立てることから始める仕事の方法は、壁と対峙したからこそ見出した姿勢だと思っています。小さな組織の小さな成長を信じていることができる6年目に感謝しつつ、歩みを進めて参ります。



センター長 副理事長
佐塚 玲子

Reiko Satsuka

PROFILE

慶応義塾大学卒、神奈川県立保健福祉大学 大学院修了
横浜市地域ケアプラザ職員、認定NPO市民セクターよこはまの勤務経験から地域福祉への関心を深める。2012年特定非常利活動法人よこはま地域福祉研究センターを故 泉一弘氏と設立。以来、センター長・副理事長として勤務

CONTENTS

- | | | | |
|----|---------------------------|----|-----------------------------|
| 3 | ごあいさつ | 18 | 障害者就労に関する研修 |
| 4 | 1年間の動き | 19 | 大学共同研究事業／Candy Lei（キャンディレイ） |
| 5 | Topix 2017ー2018 | 20 | 仕事を辞めないための介護準備講座 |
| 6 | 取組みの関連図 | 21 | デザインのちからで「伝える」 |
| 8 | 発足5年「これまで」と「これから」 | 22 | 神奈川県生活支援サービス担い手養成 |
| 10 | さまよう子ども若者のココロ | 24 | 地域包括支援センター職員研修業務 |
| 12 | 子ども・若者の居場所づくり | 26 | 第三者評価事業 |
| 14 | 子ども・若者の育ちや自立を支える支援のあり方調査 | 28 | 横浜市里親研修の実施にかかる事業 |
| 15 | 障害者雇用に関する研修 | 29 | 会計報告・活動計算書 |
| 16 | 審査員になろう！Food presentation | 31 | 団体概要／会員募集 |

2017

4

5

6

7

8

9

10

11

12

2018

1

2

3

プロジェクト

協働・委託

総会

6～2月 障害者就労に関する研修 全3回

7～3月 大学共同研究事業「ものづくり物語」

8月 肢体不自由児・者と家族のための
おでかけマインド発信マガジン「とうきょうist。」発行9月 障害児者の保護者のための相談・集いの場
Candy Lei 初めてのアロマ体験講座11月 障害児者の保護者のための相談・集いの場
Candy Lei セルフメイクが 楽しくなる”
メイクレッスン&ランチ”11～12月【実務講座】
ハンディのある人を仕事のメインプレイヤーに！
全2日

1月 審査員になろう！Food presentation

1～3月 仕事を辞めないための介護準備講座
全3日+サロン（労働プラザ）2月 障害児者の保護者のための相談・集いの場
Candy Lei 福祉車両ワークショップ”

3月 子ども若者PJ さまよう子ども・若者のココロ

3月 障害児者の保護者のための相談・集いの場
Candy Lei 親の会の育て方・活かし方5～8月 横浜市委託
横浜市地域包括支援センター職員研修（基礎）
全3日×2回通年 特別支援学校PTA連合会webサイト
「しびれん」の運営

通年 福祉サービス第三者評価事業

10～12月 横浜市委託
横浜市地域包括支援センター職員研修（応用）
全3日11月 神奈川県社協協働
子ども・若者の居場所づくり事例集 2017発行11月 大和市社協委託・地区社協リーダー研修
「伝える」から「動かす」へ作りたくなる広報誌11～3月 神奈川県委託
生活支援サービス担い手養成研修（県下8ヵ所）2月 神奈川県社協協働
子ども・若者の居場所づくりフォーラム3月 神奈川県社協協働
子ども・若者ガイドブック【対話編】発行

Topix 2017 - 2018

福祉サービス第三者評価事業

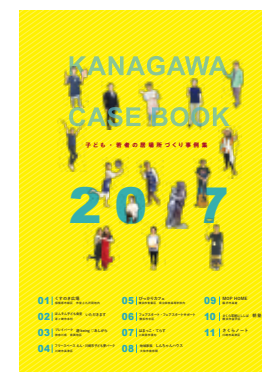


平成 29 年度も引き続き保育園の評価案件が多い状況となっていますが、少数ではありますが、障害児入所施設、高齢者 GH、小規模多機能施設、社会的養護施設など、ほかの分野の施設評価も実施することができました。

子ども・若者の育ちや自立を考える協働事業



神奈川県社協・神奈川県・神奈川共同募金会との協働事業。11 月に「子ども・若者の居場所づくり事例集」を発行、1 月には交流会、3 月には、「ガイド（対話編）」を発行しました。次世代を担う子ども・若者の未来を考え行動するたくさんの方々に出会い、活発な対話をしました。



横浜市地域包括支援センター職員研修



横浜市地域包括支援センター職員 3 職種を対象に横浜市の委託を受け実施。全 18 区内包括 3 職種が一同に会して受ける研修は他になく貴重。基礎編では市の施策、動向など専門職としての基礎知識を学び、応用編では、実践力と新しい気づきを促す研修内容を企画し、事務局を担当しました。

審査員になろう！
Food presentation

障害福祉事業所の手作り品をお客様目線でシビアに審査する、商品品評会。2017 年に続く第 2 回は「3 丁目カフェ」（青葉区）にて開催。定員越えの大盛況となりました。

【実務講座】ハンディのある人を仕事のメインプレイヤーに！



障害者雇用に関する研修をかながわ労働プラザとの協働で開催。過去のプロジェクトで「理論編」として展開してきたプログラムを企業向けにアップデートして実施しました。

障害児者の保護者のための
相談・集いの場 Candy Lei

「Candy Lei」はいろんなフレイバー（経験を持つ）のキャンディ（お母さん）の輪。気になることを一緒に考え、ひとりひとりに合った生きるヒントを一緒に探す場です。

生活支援サービス担い手養成研修



県内 8 ヲ所で、生活支援を必要とする人へのサポートを担う人を育成するための研修を、県内 8 ヲ所で開催。小地域内で生活上のちょっとした困りごとを支え合う必要性とノウハウを共有しました。

肢体不自由児・者と家族のためのおでかけ
マインド発信マガジン「とうきょうist。」

肢体不自由児と家族のためのおでかけマインド発信マガジン「とうきょう ist。」は、「よこはま ist。」「せんだい ist。」に続き、第 3 号として発行しました。バリアフリーで楽しめるお店やスポットの紹介やお母さん、お父さんたちが、日々の暮らしで感じること、お出かけの工夫など、等身大のリアルをお伝えしています。

仕事を辞めないための介護準備講座



仕事を続けながらも介護を乗り切るために、具体的なロードマップ（イメージ）をもつことが大切。知っておくべき情報は何か、事前に動いておくべきことは何か、いざとなったらどうするか、これから介護に向き合うための人を対象に全 4 回 + サロンを開催しました。

わたしたちの取り組み 事業相関図



歩みなぎところに未来はない

佐塚 玲子
センター長
社会教育・福祉啓発
プロジェクトリーダー

管理者など、夢にも思っていなかった私がセンター長となり、早5年。振り返ると、組織内外たくさんの人と歩んだ足跡があり、その一步一步に意味と価値があって感慨深いです。社会の今を、時に、過去を遡り、未来を想像し、知ろうとする作業。市民が求める社会のあるべき姿とのギャップに次第に気づきを増やしなが、何をすべきか、何ができるのか、参加者に主体性が高まり、様々な人と様々な場で対話した時間は、どれほどの量になるでしょう。楽しかった。嬉しかった。わくわくした。怒りがわいた。切なくなった。感謝した。いろいろな感情が渦巻いた、私たちなりの仕事の現場。5年が過ぎて、このようなブ

ロセスこそが地域福祉を推進するということなのではないかと思っています。

「働き方改革」が進められようとしています。「働くこと」は、子どもや若者、定年後の高齢者、障害のある人にも、今、共通の課題です。職場環境を整え、誰もが、労働者・生活者として、仕事も私的な生活も充実できるような制度を追求・整備すべきだと考えます。

働くことの喜びには、共に切磋琢磨する仲間がいること、自分の知識やスキルを最大限生かせるチャンスがあり実践できること、そして社会に役立てた実感が持てることが重要です。

「道半ば」にも達していない私たち。「働くこと」も、当センターのどのプロジェクトでも取り上げるテーマとなっており、縦割りにならない仕事の仕方を築こうとしています。5年前には見えていなくて、今見えることが、私たちのこれからを支えるという実感があります。歩みなぎところに未来はないのかもしれませんが。

現代社会は、少し前から若者の「幼稚化」が進んでいると言われていますが、高齢者も「幼稚化」が進んでいると聞きます。幼稚化の概念というのが、自分本位、依存、自己コントロールが難しいといったことらしいのです。資本主義社会で、需要と供給を考えれば、ターゲット層のパイが多いところ（団塊世代とか高齢者層）を狙います。次世代のことを考えれば、子どもたちに対してパイは小さくともメインターゲットに据えることが重要かもしれないのに、若者たちは、「時代を中心に自らがいる」とは思えなくなっているんじゃないでしょうか。もしかしたら、人々の孤立が問題になっているのに「おひとり様産業」が注目されるのも、同様の課題のように思います。

私たちの仕事は、混とんとした社会の中で、道半ばでも社会と向き合い生き抜こうとしている様々な人や組織に光を当てることも使命だと思っています。

様々な人や組織に光を当てることも使命

豊田 裕宗
理事長

そして、私たちの組織が、誰に聞いても、「研究センターの人って職員みんなが、そういう考えだね」って言ってもらえる、理念と人や地域に向かう姿勢が一致している組織でありたい。もしかすると、大人化とは、そういう組織を創ること、そういう組織の一員として仕事をするんじゃないでしょうか。



発足5年 「これまで」と「これから」

立ち上げ期、法人設立申請書類を、前職の膨大な仕事をしながら作成したこと思い出します。5年が過ぎた今、経営的には常に苦しいですが、私たちがやりたいこと、やらなければならないと信じていることを、実施しています。私たちの仕事は、5年先、10年先の先行投資的な側面があると思っています。

自主事業に限らず、委託事業や協働事業でも、「こんな仕事来たからやる」ではなく、研究センターがやるべきことか、研究センターらしさが出せるかにこだわを持ち続けたい。例えば神奈川県的生活支援サービス担い手養成研修などは、すでに4年目。県域のあちこちの地域とネットワークを構築しながら、地域事情に合わせた人材の掘り起こしにつなげたいと考えています。県の事業としても成長しているし、これからも研究センター事業としても様々な応用編的人材育成事業に発展していけると思います。子どもの問題解決にも地域で様々な人がつながりを持ち、地域力が育っていけば自然に解決していく側面もあると感じています。

「自分たちらしさ」にこだわる

武田 千香恵
子どもの地域生活支援
プロジェクトリーダー

近頃は、パラリンピックの種目にもなったボッチャの普及啓発。インクルーシブ社会の構築は法人のミッションでもあるけれど、理屈を共有するだけでなく、みんなで体験するようなことができる予感がします。小さな仕事も大きな価値の創造につながることをわかっているから大切にしたいと思っています。

自分の中にある多様性が下地になる

塚原 祥子
広報・制作プロジェクト
リーダー

これまで（海外も含め）暮らしてきた地域の文化や風土、そこで出会う人々と触れて感じたこと、経験したことなどが積み重なり、自分の中の多様性が育まれてきたと思っています。それが下地になって、日々の暮らしでも仕事でも、新しい何かに触れて、ハッと目覚める感覚に出会うとき、面白さを感じ

じます。仕事で大切にしているのは、分散した情報や考えをきちんと交通整理して、シンプルで分かりやすいかたちに変換（デザイン）すること。

何が「本質」にあるのか、コアにあるものを探ることは、子どもの時に砂場で作った砂山を掘る作業に似ています。あっちからもこっちからも穴掘りを進めているうちに、急に手がつながって、光が見えるような…。毎日、そんなわくわくする感覚を仕事の場でも求めながら、掘り進めてる感じです（笑）。研究センターのHPや制作した冊子などが人々の目に留まり、何かの行動に導ききっかけになればうれしいです。

前職NPO法人で関わった仕事が、自治体の福祉人材養成でした。継年で携わる中で、専門職の育成のみで、福祉推進はできないことに気づきました。

小さな組織を設立するのも簡単じゃないけれど、組織を継続していくには、外部の人や組織に研究センターの存在を知り、何をしようとしているのか、どんな協働を求めているのか、具体的なところを理解してもらう必要があります。これが難しく、玉砕したことも一度や二度じゃなかった（笑）。

共感を引き出し、協働につなげるためには、信念を伝えるテクニックも必要だと思います。少しずつオファーも増えてきましたが、学ぶべきこと、研究すべきことはたくさんあり、目下継続中です。

障害児者の支援プロジェクトでは、複数の自主事業を通して、市民、多様な現任者、個性豊かで私たちと同

出会い→協働→探求が面白い

吉川 典子
障害者と家族の地域生活
支援プロジェクトリーダー

様に地域社会の今に違和感を持って、何とかしようとする研究者と活動が続いています。事業を多角的に行えるようになったことでネットワークは広がっています。これからはこのネットワークから、より発展的な協働関係を生み出していきたいと思っています。



今年度のテーマは「今の社会に生きづらさを感じている子どもの育ちと自立のために何が必要なのか」。「自分がみえない」「孤立している」と感じる思春期～青年期の子ども若者が増えているといわれています。この、非常に難しいテーマについて、自立に向け自身が持つ力や家族の力では解決されない状況を、私たちはどのように理解しどのようなアクションにつなげればよいのか。今回の研修はそのヒントを得る時間としました。

臨床心理士でいらっしゃる西澤氏のご専門からとらえる「さまよう子ども 若者」は、これまでお迎えした講師とはまた違う切り口からのアプローチで、受講者の理解を深めることにつながりました。テーマを様々な視点から深堀していくこと。当センターが重視する「多様性」は、講師の選定の時点から始まっています。

実施概要

日 時：平成30年3月16日（金）13：00～16：45
会 場：横浜市青少年育成センター 研修室1
参加者：一般15名（男性1・女性14）、スタッフ12名 計27名

■1部 講演

「さまよう子ども 若者」
～社会で子ども若者の自立を支援するために～
講 師：西澤 哲氏
（山梨県立大学 人間福祉学部長 臨床心理士）

■2部 ワークショップ

「気づいたこと」「わたしたちにできること」

参加者の感想

- 現場で感じていた「選択」していくことの大切さを、プロの言葉で聞く事ができて有意義でした。関わりを息長く続けていくこと、メンバーと今日の内容を共有します。
- 先生のお話は、今の子どもたちを知る大きな手掛かりになりました。社会的養護者への支援をすすめるには、社会全体で問題の背景を理解をすることが必要だと思います。
- 知らないこと、普段考えないこと（意識しない事柄）を改めて知る機会となり、参加できて良かったです。



プロジェクトリーダー
武田 千香恵

子どもの地域生活支援プロジェクトも、当センター開設とともに5年度目が過ぎました。「子どもの福祉の再構築と向上を目指し、アクションにつなげる」を目標に毎年テーマを設定し、研修やイベントを実施しています。

子ども・若者に関する問題、取り上げるべきテーマは年々複雑化しています。「このことには、これがあれば」「この年齢の子どもにはこれがあれば」という特効薬で解決されるわけではありません。子どもの問題は、家族の問題ともいえます。解決手段として特効薬を探すのではなく、じわじわと効果が現れるよう、長期間にわたり様々なアプローチで関わり続けることが、中間支援組織である当センターの役割と考えています。

そして、まずは子ども・若者とともにある周りの「大人」に現状理解と気付きを促すことが最も重要だと考えます。家族のあり方も変わり、子どもたちのつながる手段に「SNS」という新しいツールが生まれ、見えなくなったもの、見せなくなったもの、分かりにくくなったことなどを紐解きながら、子どもや家族の賛否だけでなく、「自分ごと」として一人でも多くの大人に関心を持ってもらいたいと思います。

これからも子ども・若者が安心感と自信をもって生きていける社会の創造に向け、小さくても確実なムーブメントにつなげていきたいと思っています。



お話を伺った方



西澤 哲氏 山梨県立大学 人間福祉学部長 臨床心理士

【人と人がつながる力がはぐくまれていない日本】（講師講演より）

- ・「アタッチメント関係が確立すると、子どもを内面から支えてくれるものができる。それは心の中に住んでくれる人ができることであり、他者視点が養われること。それによって相手の痛みが初めて感じられる」
- ・「人間関係の中で自分が育てられる。他者との関係性がない家庭環境で過ごした子どもは、自己が育まれていないので、見えにくく、捉えどころのない子どもとして成長する」